

資料4 学んだことの喜びを味わえるまよめの学習につながる活動

段階	学 習 活 動	学 年	
		下	上
課題をもつ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 前時までの学習を言う。(つぶやく。発表する。)</li> <li>○ さしえ等から課題を言う。(つぶやく。発表する。)</li> <li>○ 語句、文、文章や構成などから読みへの疑問や課題を言う。書く。</li> </ul>	○	○
読みの見通しをもつ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 課題に対して自分なりの読み(予想)を吹き出しに書いたり、書き込みをしたり、感想などを書く。</li> <li>○ 手がかりとなる語句や文に、印や線を引き、書き込みをする。</li> </ul>	○	○
読み深める	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 小集団、全体学習の場で自分の読みを言う。話し合う。</li> <li>○ 自分の読みと他の読みを比べ、相違点や類似点を聞き取る。</li> <li>○ 自分の読みをふり返り、加除修正する。(印す。抹消する。書き加える。)</li> </ul>	○	○
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の読みと他の読みを比べて自分のまよめに生かし、吹き出しや感想を書く。</li> <li>○ 自分の読み取りが適切であったかどうかを、学習過程をふり返って考え、わかったことや感想をノートやワークシートに書く。</li> <li>○ 読み取ったことをイメージ化し、効果的に音読する。</li> <li>○ 予想した読みとまよめた読みを比較する。</li> <li>○ 新しい疑問、もっと学習したいことをメモしたり、発表したりする。</li> </ul>	○	○

「わたしひくわ」「わたしゆるわ」に着目して、悲しみを乗り越えて生きようとする千枝子と端枝の姿を話し合いの中からとらえていく。

④「まよめる」段階  
学習の整理、結果の確かめ、学習内容の定着、次時への意欲づけを図り、学んだことの喜びを味わわせる。

(資料4参照)  
予想した読みとまよめた読みとを比べて、学んだことを自覚させた例  
二年(スーホの白い馬) 課題  
「スーホは、どんな気もちで矢をぬいたのでしょうか」  
(予想した読みの吹き出し)  
「白馬しないでおくれ。」

→  
(まよめた読みの吹き出し)  
「ほくの白馬、こんなになってまできたのか。ぜったいしなせてなるものか。」

四、成果と課題

(一) 成果

(1) 予盾や対比するふたつの事象、既有的知識や経験では説明できない事象、部分的に不足のある事象を提示すると好奇心が誘発され、興味をもって学習に立ち向かう。

(2) 一人学習の場を設定し、書く、作る。操作するなど、作業的な学習を組織すると学習の自立が図られる。その間、机間指導により個別指導をすると目標達成に向けて本気になって学習を持続する。

(3) 吹き出し、ワークシート、ノート

(二) 課題

(1) 直線的な学習になり易い。多様な思考や個性を生かさそうとすると、このモデルでは時間がかかる。個の学習と集団の学習とのかかわりを見直す。

(2) 一単位時間ごとにこの段階を踏むということではなく、一単元の学習過程として展開して、さらに深めていきたい。

自ら生き生きと学習する生徒をどう育てるか

いわき市立江名中学校

一、研究主題設定の理由

科学技術のめざましい進歩とともに、国際化、情報化、高齢化など社会環境の変化の中で、子どもを取り巻く生活環境も大きく変化してきている。

本校の生徒を取り巻く社会の変化もまた同様である。そこで本校は、昭和六十二年度からいわき市教育委員会より実践校として指定を受けたこと

を機会に、生徒の実態を調査し、学校の課題を明確にして、実践を推進することにした。

○ 本校の実態

本校は、漁業を主とする地域を学区としている。生徒は明るく素直であるが、反面、やればできる能力を持ちながら、それを一人一人が十分に発揮していない傾向にあり、学習の